

日本中國學會報 第73集 抜刷
2021年10月9日 発行

学界展望 (文学)

齋藤	史
田口	一郎
谷口	洋
上原	究一
大木	康
鈴木	将久

『中国文集日本古注本叢刊』（上海社会科学院出版社）が刊行された。影印出版に関して国境にこだわる必要性はないが、近代日本漢学に関する影印・資料の出版は頼もしい。

李セボン『「自由」を求めた儒者—中村正直の理想と現実』（中央公論新社、2020）は、中村正直（1832～1891、号敬宇）の思想を内在的に読み解くことで、儒学的な思考の延長にある彼の思想体系の中に西洋思想やキリスト教が矛盾なく包摂され得たことを明らかにする。

山村奨『近代日本と変容する陽明学』（法政大学出版局、2019）は、近代以降、「陽明学」がいわばマジックワード的に意味を拡張しながら、反体制的な思想という魅力を持てに帯びつつ受容されていくことを分析する。本書は末尾で現代の「陽明学研究」と「近代日本の陽明学」の関係を取り上げる。近代日本漢学研究は、中国学の研究史理解と接続する。「近代日本漢学」さらには「日本漢学」研究は、中国学に間借りしている居候ではなく、中国学の足元を照らす灯としても重要な意味を持っているといえよう。

（高山大毅）

●文 学

本年の「学界展望（文学）」は、一昨年と同様、東京大学に所属する関係教員が執筆を分担し、大学院人文社会系研究科中国語中国文学研究室の齋藤希史がとりまとめを行った。

展望の執筆にあたっては、2019年および2020年に日本国内で刊行された単行本を中心に、執筆者それぞれの視点から、領域ごとの研究の大きな流れが見えるよう努めた。二年分が対象となったのは、昨年の執筆時期に新型コロナウイルスの感染拡大防止のために大学や図書館の立ち入りに制限が加えられる事態となり、調査と執筆に支障を来したため、出版委員会での協議を経て、この分野の展望掲載を見合わせたことによる。

なお、本年の分類は、「総記」「先秦・兩漢」「魏・晋・南北朝」「唐・宋」「元・明・清」「近現代」とした。齋藤（「総記」「魏・晋・南北朝」「唐・宋」）以外の執筆者は、項目の執筆順に、田口一郎（総合文化研究科、「総記」）、谷口洋（総合文化研究科、「先秦・兩漢」）、上原究一（東洋文化研究所、「元・明・清（戯曲・小説）」）、大木康（東洋文化研究所、「元・明・清（詩文）」）、鈴木将久（人文社会系研究科、「近現代」）である。

（齋藤希史）

一、総記

「総記」については、図書分類上の「総記」という項目にこだわらず、「比較文学」「日本漢文学」等に関する著作もここで言及することとした。領域にとらわれない研究が近年盛んになっているからである。

まず飯倉照平『中国民話と日本—アジアの物語の原郷を求めて』（勉誠出版、2019）。著者の南方熊楠研究や中国民話の翻訳はすでに何冊かにまとめられているが、民話研究に関しては初の論考集。著者の逝去直前に出版された。全体は「孟姜女民話の生成」

「中国民話と日本」「中国民話の世界」「中国の「現代民話」」「研究回想」の五部から構成される。著者は様々な民話に対して、故事の通時的な変遷、広く東洋における地域的な差異、伝播の構造など、多彩な切り口から挑む。それらは常に意識的に具体性をもって考察され、資料との格闘の跡を見せぬ安定した文体で記される。これだけの大著のなかにユング・元型等の文字が見られないのは、方法論の上での著者の覚悟の現れだろう。「研究回想」は中国民間文学研究史の貴重な資料である。

福田素子『債鬼転生—討債鬼故事に見る中国の親と子』（知泉書館、2019）は、転生復讐譚の一類型としての「討債鬼故事」をめぐる領域横断的な論考。全体は大きく「討債鬼故事の成立まで」「討債鬼故事の変容」「討債鬼故事と日本」の三部と、補論「偽経『仏頂心陀羅尼経』の成立と版行・石刻活動」からなる。本書は「〇〇における」のように対象を絞るのでなく、故事自体を考察の中心に据えることで、対象を小説・詩文・仏典・雑劇・日本書・伝承文芸とジャンル横断的に広げたところに特徴があり、その考察は討債鬼故事の発生から展開、変型の整理や背景分析まで含めると千数百年の広がりをもつ。そこでは文学・歴史・思想の枠は取り払われ、中国のみならず近隣地域における倫理観・世界観の大きなうねりを明らかにしつつ、固有の差異から時代性・地域性を浮き彫りにする。

中国文学から他のジャンルへ超域的な広がりを見せたのが上記二書だとすると、日向一雅編『韓国漢文愛情伝奇小説』（白帝社、2020）は、「漢文」世界の地理的な広がりとして、そこでの固有性を明らかにする。本書は「周生伝」「憑虚子訪花録」など、16世紀から18世紀半ばにかけての五篇の（朝鮮古典小説用語としての）「伝奇小説」の解説・訳注からなる。朝鮮時代の決して穏やかでない社会的背景や厳しい身分制度という固有の条件が、漢文小説という大きな枠組みのなかで、時に自己抑制をかけ、時に逸脱を図り、独自の漢文世界を築き上げていることがよくわかる。語法・典拠の使用例にも興味深い点が多々あり（江戸の漢詩文との典拠の類似など）、東アジア地域において「漢文」がもった機能・役割について考える契機となる。所収の野崎充彦「解説にかえて—韓国漢文小説へのアプローチ」は短くはあるが、朝鮮古典小説の枠組みと特質を述べて示唆に富む。

他分野の知見を縦横に用いた力作として、古川末喜『二十四節気で読みとく漢詩』（文学通信、2020）も、他書にはない特色をもつ。本書は題名から予想される漢詩歳時記のようなものではない。太陽暦をふまえる二十四節気に注目することにより、旧暦の日付では大きくずれることのある季節感を捉えるのみならず、天文・暦・気候・動植物の生態の知識を動員し、作詩の具体的日時確定、その時の天候・気象、詩人と自然風物との具体的な関係などを明らかにし、採録詩の背景を見事に描き出す。採録詩の多くが邦訳注のないものであることも著者独自の努力を示す。100頁を超える「序編 二十四節気概説」は二十四節気に限らず暦・気象・天文の概説として、それだけでもたいへん有用である。

（田口一郎）

日本漢詩の分野では、かつては国文出身と中文出身の研究者との間で対象への距離の取り方が異なっていたところもあったように思われるが、近年はそうした「壁」はあま

り意識されなくなり、水準の高い成果が生まれていることは喜ばしい。

荒井健・田口一郎訳注『荻生徂徠全詩 1』（平凡社東洋文庫、2020）は、全四巻で徂徠の詩 721 首に訳注を施すことを企図し、本書には『徂徠集』巻一および巻二を収録する。みすず書房版『荻生徂徠全集』が未完のままになっていることから、徂徠詩の訳注はいくつかの選集に取られる詩に限られ、また、その詩の全貌を把握しようとする著作もなかった。徂徠の詩がどのように作られたかに明確に焦点をあてた密度の濃い本訳注は、「古文辞」あるいは擬古とは何かを考える上でも、また、中国古典詩というジャンルのもつポテンシャルを考える上でも、重要な手がかりとなる。巻末に収められた「頻出語彙」も有用。

紫陽会編著『大沼枕山『歴代詠史百律』の研究』（汲古書院、2020）は、中国の歴代人物を七言律詩で 103 首にわたって詠じた当該詩について、底本の解題（詹滿江）と諸本の異同（澤崎久和）を置いた上で、第一部を訳注（石川忠久・市川桃子・澤崎・詹・三上英司・松浦史子・有木大輔・大村和人・高芝麻子・遠藤星希・大戸温子）にあて、高芝・有木・詹・大村による七章の論考を第二部とする。科学研究費による共同研究をまとめた八百頁を超える大著で、主要二種の版本の画像・テキストデータ・改刻部分の版木画像を収めた CD-ROM が附せられる。大沼枕山の詩、あるいは幕末明治期の詠史詩に新たな光をあてたものとして、注目されよう。

滝川幸司・中本大・福島理子・合山林太郎編『文化装置としての日本漢文学』（勉誠出版、2019）は、前二書とは異なり、さまざまな論考によって日本漢文学研究の現在と展望を示す試みである。「日本漢文学」研究について、対象の多様性はもとより、それをどのように分析するかについても多くの視点や方法があることが本書から教えられる。おそらく現在はまだ混沌と言つてよい状況のように思われるが、ここからまた大きな流れが生まれてくるのであろう。

詩文からはやや離れるが、2019 年 12 月より全八巻が刊行された『講座 近代日本と漢学』（戎光祥出版）は、講座形式の論文集として、「漢学」が近代の学問領域としてどのように再構成されたのかを多様な視点から明らかにする。とりわけ、第 1 巻『漢学という視座』および第 4 巻『漢学と学芸』は、近代日本における中国文学研究の成り立ちを見る上で、興味深い論考が並ぶ。

論考ではなく実体験の記録としてそれを示してくれるのが、九州大学中国文学会編『目加田誠「北平日記」——一九三〇年代北京の学術交流』（中国書店、2019）である。戦前戦後を通じて日本の中国文学研究の牽引者の一人であった目加田誠が中国留学時代に記した日記に、驚嘆するほど詳細な注釈が静永健をはじめとする九州大学中国文学研究室のメンバーによって施され、当時の学問のありかた、交流の豊かさが彷彿とする。目加田の留学とほぼ同時期の北京の地図の複製が附録されているのも、街区を歩む心地に誘われて嬉しい。

（齋藤希史）

二、先秦・両漢

前回の本欄で、「いま古代文学を研究することは、二十世紀の知とどう向き合うかということでもある」と、大上段に振りかぶったようなことを書いた。しかし、真摯な研究者であれば、そのことは当然実践の中で示している。

藪敏裕『『毛詩』の文献学的研究—出土文献との比較を中心に』（汲古書院、2020）は、新資料を駆使した『詩経』研究であるが、単に出土文献を解釈の補助資料として用いたものではない。ここには、二十世紀の『詩経』研究が追求した詩の原初的解釈を、批判的に継承する姿勢がある。同時に、本書が『詩』あるいは『詩経』の研究ではなく、『毛詩』の研究と題されていることにも注意しなければならない。原初の詩のあり得べき姿を追い求めるだけでなく、それがいかにしてわれわれの見る『毛詩』という文献になったかという問題意識が、全体を貫いている。

松田稔『『山海経』の文献的研究』（東方書店、2020）は、『『山海経』の基礎的研究』（笠間書房、1995）・『『山海経』の比較的研究』（同、2006）に続く、著者3冊目の『山海経』専論である。ここでは、類書の引用を中心として、『山海経』の本文がいかに伝承されたかを詳細に探究する。一方で、漢から唐までの詩文における山岳・登高・求仙などに関する考察を補遺として収め、本文研究の背後に広がる著者の知的関心が示される。「中国古代の人々の心を知る」というその目的意識は、二十世紀の民俗学的研究に連なる。

われわれが古代の歌謡や神話について考えることができるのは、それが何らかの形で文献に残されているからである。しかし、文献に残されているものは、もはや古代の姿そのものではない。民俗学・人類学や宗教学などの外部の枠組を古代の文献に安易に当てはめることは厳に慎まねばならないが、それら関連諸学をふまえた二十世紀の知見を全く知らずには済まされない。両者間の緊張に満ちた往還の中にしか、研究の深化はない。共に「文献」の語を書名に含みつつ、文献研究の枠を越えた視点をもつこの両著に、改めてそのことを教えられた。

知の継承ということでは、文庫の再刊とはいえ、吉川幸次郎『論語』上下（角川ソフィア文庫、2020）にふれないわけにはいかない。『論語』の文章のリズムや音声面にも配慮した、思想研究者とはひと味違う着眼は、学生役の尾崎雄二郎を前に口述するという『論語』さながらのスタイルとも相まって、今なお新鮮さを失わない。1959年に朝日新聞社「中国古典選」の一冊として上巻が出版されて以来（下巻は1963年）、「新訂中国古典選」（1965-66）・朝日文庫（1978）・朝日選書（1996）と形を変えつつ、『論語』の魅力を伝えてきた。版元を替えて装い新たに刊行されたことで、新しい世代にも広く手にとってもらえることだろう。これを見越したかのように、貝塚茂樹訳注『論語』も再刊された（中公文庫、2020）。孔子をあくまで歴史の中の存在としてとらえようとする、これまた旗幟鮮明な一冊である。

名著が読み継がれるのはうれしいことだが、古典の継承には、新たな角度からの読み直しもまた欠かせない。謡口明『弟子の視点から読み解く『論語』』（漢文ライブラリー、

朝倉書店、2019) は、主な弟子に一章ずつを充て、それぞれの人物像と、孔子との関わりがうかがえる条を集めて平易に解説する。『論語』が孔子の自著でなく弟子たちに受け継がれた言葉であることを考えれば、『論語』を一種の伝承文学として捉え直す試みは、もっとなされてよい。(谷口 洋)

三、魏・晋・南北朝

魏晋南北朝を対象とした著作としては、まず福井佳夫『六朝書翰文の研究』(汲古書院、2020) を挙げたい。六朝期に盛んとなった書翰文についてこれまで著者が三十年にわたって発表してきた文章によって構成され、その範囲は、曹丕、王羲之、鮑照、劉孝儀、蕭統、蕭綱、王褒から無名氏の作や模範文例集まで、幅広い。第一章では、殷周から六朝までの書翰文を概観し、中国文学における書翰の位置と六朝書翰文の特徴が端的に示され、第二章以下は、時代順に個別の書翰を取り上げ、自由闊達な筆さばきで論じていく。六朝期の書翰といえば修辞をこらした駢文で書かれ、いまとなっては読みやすいものではないが、原文の構造の図解、わかりやすい現代語訳や語注の助けによって、この時代の文章になじみがなくとも、六朝書翰がどのようなものであったかがわかる。日本における漢文書簡、ひいては往来物などへと続く候文による書簡の修辞について考える上でも、参照すべき書物であろう。

福井氏は六朝書翰文について「寒門文人や野心ある若者が立身のきっかけをつかむには、簡便で都合のよい文学ジャンルであった」(まえがき) と記すが、その「寒門文人」という存在がいかなるものであったかを明らかにするのが榎本あゆち『中国南北朝寒門寒人研究』(汲古書院、2020) である。基本的には歴史学の立場からの研究ではあるが、第三章「劉孝標をめぐる人々—南朝政治史上の平原劉氏—」、第五章「梁の中書舎人と南朝賢才主義」、第七章「北齊の中書舎人について—顔之推、そのタクチクスの周辺—」、さらに第十三章「『南史』の説話的要素について—梁諸王伝を手がかりとして—」、第十四章「再び『南史』の説話的要素について—蕭順之の死に関する記事を手がかりとして—」など、六朝文学研究に資する論考は少なくない。もとより、寒門寒人の存在が六朝文学にとってきわめて重要な要素であることを考えれば、歴史研究か文学研究かといった区分は当座のものとするべきかもしれない。

それは、佐野誠子『怪を志す 六朝志怪の誕生と展開』(名古屋大学出版会、2020) の帯に「歴史と宗教のあしもとで」とあることにも通じるだろう。この書は序章で全体の導入を述べた後に、全体を二つの部にわけると、第Ⅰ部は「史の伝統の中で」、第Ⅱ部は「仏教を受け止めて」と標される。それぞれ三章からなり、六朝期において「怪を志す」ことがどのような意味をもっていたかを精密に跡づけていく。終章「中国「小説」史への吸収」は、六朝志怪の特徴を改めて指摘しつつ、唐代以降への流れも展望するが、通り一遍のまとめではなく、第六章までの論述をふまえた著者ならではの視点の一つの文学史を描き出す。志怪小説研究を新しい段階に進めた成果と言える。

以上の三書からは、手法も対象も異なりながら、六朝もしくは魏晋南北朝という時代の輪郭が浮かび上がってくる。狭い意味での研究領域意識を超えたところに読者を導く

のである。その思いは、吉川忠夫『六朝隋唐文史哲論集』Ⅰ「人・家・学術」Ⅱ「宗教の諸相」（法藏館、2020）を読めば、いっそう強まる。「文史哲」を縦横に通じる著者の学識の深さと広さ、そして鋭さは言うまでもなく、それぞれ600頁を超える二冊の重みにも茫然とはなるが、本来の学問のすがたをこうして手にできるのは、まことに貴重であり、後学として励みとすべきであろう。

領域意識からの解放という点では、石碩『謝朓詩の研究 その受容と展開』（研文出版、2019）もその一つの成果だと見なせる。宣城期の謝朓の詩作の意義に着目し（第一章「詩人「謝宣城」の誕生—謝朓詩における荊州と宣城」）、その表現の特質を明らかにした（第二章「謝朓詩における「窓」の風景—遠景描写の一手法」）上で、李白による謝朓の受容の意義を第三章から第七章まで論じる本書は、謝朓詩のもつ力がどこに発し、どこで見出され、どこへと広がっていったかを一連のものとして見ようとする。「受容と展開」という副題以上に、これまでの六朝詩研究の枠を超える可能性を有した著作であろう。

大上正美『『世説新語』で読む竹林の七賢』（漢文ライブラリー、朝倉書店、2019）は、阮籍から王戎までの「七賢」およびその諸子の逸話を『世説新語』から取り上げて訳注を施し、人物と言動のありようを詳細に解説する。序章「『竹林の七賢』と『世説新語』」は、「竹林の七賢」とはどのような存在か、『世説新語』とはどのような書物か、著者の知見を端的に示して読みごたえがある。

蔣義喬編『六朝文化と日本—謝靈運という視座から』（勉誠出版、2019）は、謝靈運を軸に六朝と日本を大きな視野に収めようとする意欲的な論文集であり、啓発される論考も少なくない。今後、こうした試みが積み重ねられることによって、魏晋南北朝期の文学研究が開かれた領域として発展することを期待したい。なお、前回の本欄で紹介した『文選 詩篇』（岩波文庫）が2019年に（五）（六）の刊行をもって完結したことも、その後押しとなるに違いない。（齋藤希史）

四、唐・宋

まず『新釈漢文大系 詩人編』（明治書院）シリーズの刊行開始について。新釈漢文大系には『詩経』『楚辞』『文選』はもとより、『白氏文集』『唐詩選』また『古文真宝』『日本漢詩』など詩文の訳注も収められてきたが、中国古典詩の世界にわけいるには物足りなさを覚えることもあった。このたび新たに「詩人編」が企画され、六朝から宋まで13人の詩人が全12巻の構成でとりあげられることとなったのは喜ばしい。新釈漢文大系は、中学高校の漢文教育においても広く利用されており、本訳注もまた、日本の中国学の成果を広く開くものの一つとしての意味をもつだろう。その皮切りとして2019年5月に和田英信『李白 上』と川合康三『杜甫 上』が刊行され、2020年には齋藤茂『杜牧』および二宮美那子・好川聡『王維・孟浩然』が加わった。いずれも詩人についての解説の他、現代語訳・語注・詩解がそなわり、訳注者それぞれの持ち味が生かされている。唐宋の詩人では、他に赤井益久『韓愈・柳宗元』、内山精也『蘇軾』、緑川英樹『黄庭堅』、浅見洋二『陸游』が続刊予定である。

研究成果を広く開くということでは、向嶋成美編『李白と杜甫の事典』（大修館書店、2019）の意義も大きい。向嶋氏は本書の完成を待たずに亡くなられたが、遺稿となったⅠ「李白と杜甫」ではこの二人を並べることの意味を問い直し、本書の意義を明らかにする。ⅡとⅢは、李杜それぞれの「生涯」、「旅」、そして分類立てされた詩の訳注と解説からなる「詩の世界」。さらにⅣ「李白と杜甫を知るために」では、李杜のみならず唐詩を読むために必要な官制や語法などさまざまな知識が網羅される。本書所収の詩を用例とした助字解説も充実している。

個別の研究としては、長谷部剛『杜甫詩文集の形成に関する文献学的研究』（関西大学出版会、2019）が着実な業績としてまず挙げられよう。第一部「本論」は唐代から宋代にかけて杜甫詩文集がどのように集成され流伝したかをていねいに考証し、あわせて『錢注杜詩』にも説き及ぶ。第二部「各論」は「兵車行」や「江南逢李龜年」詩にそれぞれ即した二章と『錢注杜詩』の「李云」が李因篤であることおよびその意義を明らかにした一章からなる。中国学の基本に忠実な研究として継承されるべきであろう。

乾源俊『生成する李白像』（研文出版、2020）は、李白が生み出したテキスト、例えば「蜀道難」や七言歌行の特異さをさまざまなコンテキストから分析してあぶりだし、そこに生まれる詩人の自己像とその作品世界との関係を掘り下げ、また、「謫仙人」といった李白についての語りを李白自身のものも含めて一つ一つ点検しながら、後世に及んで形成される李白像の意味について、中国古典詩における作者とは何かを問いつつ論じる（本論「楽府論」「歌行論」）。李白文集序における李白像を検討するさいも（序論）、また李白が科挙制度の一環としての「逸人の挙」によって玄宗に徴召されたことを考証するさいも（本論「伝記論」）、李白詩の語りとのかわりが常に検討される。文学史的観点を保持しつつ、中国古典詩読解の可能性を徹底して試みた無類の李白論と言える。

一方、新たな視点から古典文学を読解し直す研究も注目される。山崎藍『中国古典文学に描かれた厠・井戸・簪—民俗学的視点に基づく考察』（勉誠出版、2020）は、タイトルが端的に示すように、民俗学の視点によって、文言小説や古典詩などを広く素材として、中国古典文学に描かれた道具や儀礼の意味を探ろうとするものである。元稹「夢井」（第二、三章）、李白「長干行」（第四章）、李賀「後園鑿井」（第五章）、白居易「長恨歌」（第六章）など、長年にわたって親しまれてきた唐詩の名作に、従来とは異なる観点から新たな読解を試みる。たんに民俗学的視点をあてはめるのではなく、先行解釈の妥当性を検討し、文献による徴証を重ねながら、これまで可視化されてこなかったコンテキストとしての習俗を浮かび上がらせようとする。モチーフによってこの手法の有効性には濃淡が生じるようにも思われるが、そうした方法面での考察も含めて、今後の展開を期待したい。

浅見洋二『中国宋代文学の圏域—草稿と言論統制』（研文出版、2019）が注目するのは、社会的コンテキストである。「文学テキストを取り巻くコンテキストは複雑かつ多様であり容易に見通すことはできない」（「序言—テキストの「公」と「私」—文集について」とした上で、本書は「公」と「私」を視点として設定し、第一部「草稿—文学テキストの生成」では草稿を手がかりに「私」の圏域におけるテキスト生成を論じ、第

二部「言論統制—文学テキストと権力」では「公」の圏域で流通するテキストが不可避的に直面する権力との緊張関係を「言論統制」として分析する。宋代文人による校勘の営みからかれらのテキスト生成論的意識を読み取り、一方でかれらが公的圏域と私的圏域が重層する世界をテキストの可変性を武器に生き抜くことを論じる本書の射程は、宋代文学に限定されない示唆を読者に与える。(齋藤希史)

五、元・明・清

(1) 戯曲・小説

元明清の戯曲・小説やその日本における受容に関わる書籍は、2年続けて質・量ともに非常に充実していた。そのうち川島優子『『金瓶梅』の構想とその受容』(研文出版、2019)、加部勇一郎『清代小説『鏡花縁』を読む—19世紀の音韻学者が紡いだ諧謔と遊戯の物語』(北海道大学出版会、2019)、竹内真彦『最強の男—三国志を知るために』(春風社、2020)は、課程博士の取得は求められながら、博士論文を著書として公刊する道筋が必ずしも設けられていなかった世代に属する研究者が、院生時代からの研究テーマをまとめあげた待望の著書であった。若手研究者の博士論文に基づくものとしては、丸井貴史『白話小説の時代—日本近世中期文学の研究』(汲古書院、2019)が挙げられる。そして、長尾直茂『本邦における三国志演義受容の諸相』(勉誠出版、2019)、田仲一成『明代江南戯曲研究』(汲古書院、2020)、大木康『明清江南社会文化史研究』(汲古書院、2020)、小松謙『水滸伝と金瓶梅の研究』(汲古書院、2020)といったベテランの大著や、尾上兼英『中国小説史研究序説—尾上兼英遺稿集II〔古典小説・藝能篇〕』(汲古書院、2020)も、この2年の間に相次いで刊行された。

丸井『白話小説の時代』は、第一部で『今古奇観』の日本近世文学への影響、第二部で初期読本の周辺領域における白話小説受容の様相を論じ、第三部では白話小説を原話とする初期読本の作品論的分析を行う。著者は国文学が専門で本会の会員でもないが、北京への留学経験を持っており、第一部第一章『『今古奇観』諸本考』はその間の調査の成果によるところが大きいという。白話小説が江戸文学に与えた影響は石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文学史』(弘文堂書房、1940)以来多くの研究の積み重ねがあるテーマであるが、中国側の作品の版本研究までも自ら手掛け得る国文学研究者の出現は心強い。逆に、中国文学研究者の手になる川島『『金瓶梅』の構想とその受容』は、第二部が専ら江戸時代の『金瓶梅』受容を考察するものとなっている。近年は江戸文学を専攻する中国語圏出身の研究者も増えているようで、明清通俗文学研究と江戸文学研究との間の垣根が低くなって来ているのかもしれない。

長尾『本邦における三国志演義受容の諸相』は、第一部では中世の博士家や禅林における「全相平話五種」(とりわけ『前漢書平話統集])や三国志関連の故事の受容の様相を明らかにしながら『三国志演義』が日本に伝来した時期の検討を試み、鎌倉末から南北朝の時期に『三国志演義』が読まれていた可能性は低いとする。日本における受容のみならず、『三国志演義』自体の形成過程や成立時期を検討する上でも大変重要な指摘である。第二部は『三国志演義』の本邦初訳である湖南文山『通俗三国志』を様々な面

から多角的に論じ、第三部では『三国志演義』の描く人物像が江戸時代の漢詩文や絵画や思想に浸透していったさまを、豊富な事例を挙げて示している。

竹内『最強の男』は、『三国志演義』が最強の武将として描く（と広く認識されている）呂布のキャラクターとしての形象論を中心とした12篇の既発表論文を土台とするが、一般向け書籍として編まれており、紙幅の3分の1を「陳寿と裴松之」と「羅貫中と毛宗崗」という2つの附章に割く。こうした構成となった背景には、現代の日本では三国志というコンテンツには抜群の知名度があり、それは確実に『三国志演義』の物語に淵源しているにもかかわらず、三国志コンテンツは専ら「歴史」ものとして消費されていて、『三国志演義』自体はろくに読まれてもいない、という現状への著者の慷慨がある。それだけに本論のみならず附章も大変な力作で、特に近代小説とは大きく異なる元明清白話小説の特徴である「版本」と「作者」の問題に関して当該分野の研究者の多くが近年共有しているであろう問題意識を明快に表出した「羅貫中と毛宗崗」は、むしろ他の分野を専門とする研究者こそが率先して読んでおくべき内容に仕上がっているようにも感じた。例えば、太田出『関羽と霊異伝説—清朝期のユーラシア世界と帝国版図』（名古屋大学出版会、2019）は関羽信仰の主に清朝期における広がりをも多角的に考察した良書ながら、『三国志演義』の扱いに関しては、元末明初に撰された羅貫中の作品と位置付けてしまっている点と、清初の改訂版である毛宗崗本しか利用していない点とが非常に惜まれる。今後「羅貫中と毛宗崗」が広く読まれるようになれば、隣接領域の研究にこうした瑕が生じてしまうことは大きく減るものと期待される。

小松『水滸伝と金瓶梅の研究』はまさにその「版本」と「作者」、そして小説の「近代」性の問題を徹底的に掘り下げた専門書。第一部では小松氏自身が発見に寄与した第二の石渠閣補刻本を含めた『水滸伝』諸版本の継承関係を整理した上で、文章表現や文字表記の細かな異同を詳細に分析し、『水滸伝』本文の変遷は白話文が書記言語として確立する過程の縮図として捉えられると喝破する。更には金聖歎の改編について、「近代」的な規範意識が確かに存在することを指摘している。第二部では口頭語語彙を用いて一人の作者が独自の構想のもとに社会の諸相を描き出した最初の近代的小説だと位置付けられる『金瓶梅』の全登場人物の名・字・号・官職を各種電子文献の徹底した検索によって精査した上で、悪意的に描かれている登場人物の多くに嚴嵩・郭勛・李開先・唐順之ら嘉靖8年進士を中心とする人脈に連なる人物を連想させる要素があることを指摘する。他の分析結果も併せて、『金瓶梅』は早くから唱えられていた俗説の通り、彼らと対立的だった王世貞ないし彼に近い人物が、個人的怨恨を籠めて書き、政治的目的で流布させた可能性が高いと結論付けている。鮮やかで刺激的な行論もさることながら、第一部は昔ながらの手作業による諸版本の綿密な比較校勘と精読、第二部は電子検索の環境が整ったことで初めて可能となった膨大な数の登場人物の名・字・号・官職の悉皆調査という、新旧の対照的な研究手法が各部の根幹となっている点には敬服するよりない。

川島『『金瓶梅』の構想とその受容』は、前述の通り第二部では江戸時代の『金瓶梅』受容の様相を考察するが、第一部では真っ向から作品論に取り組み、詳細な描写が

繰り返される点を『金瓶梅』の最大の特徴と捉えた上で、女性たちの描かれ方の検討を中心に『金瓶梅』の構想を論じている。作品の「近代」性をめぐっては、人間のありのままの姿を描写するという意味で近代小説の誕生を告げるものと言える面があるとしても、『水滸伝』や『西遊記』などの前近代小説に顕著に見られる人物描写における一貫性の欠如が『金瓶梅』にもある程度認められることも指摘しており、『金瓶梅』の人物描写は前近代小説から近代小説への転換点に位置づけられるべきであろうとまとめている。

加部『清代小説『鏡花縁』を読む』は、嘉慶年間に成立した白話小説である李汝珍『鏡花縁』の本邦初の研究書で、物語内部に由来する〈圈〉〈縁〉〈半〉といった観念を主軸に据えて、李汝珍の音韻学者としての一面にも注意を払いながら、『鏡花縁』の趣向を丁寧に読み解いている。作者李汝珍の思考を丹念に追跡しようとする本書の試みは、語り物や戯曲とも影響しあう長い成立前史があつて「作者」を想定しがたい明代や清前期の白話小説とも、西洋文学の影響も受けて「近代」色が濃くなる清末以降の小説とも異なる、この時期の文人による作品ならではの特質を捉える上で大いに功を奏している。

田仲『明代江南戯曲研究』は1973年から87年にかけての旧稿を大幅に増補して再構成したもので、『琵琶記』『荆釵記』『白兔記』『拜月亭記』『殺狗記』の五大南戯及び北方で成立した雑劇ながらそれらに近い特徴を持つ『北西廂記』の6種の戯曲について、長く社祭演劇用に用いられてきた「古本」が、明代中期の嘉靖年間あたりから福建で刊行された「閩本」を媒介としつつ、明末までに優雅な宗族用劇本の「京本」と通俗的な市場地用劇本の「徽本」とに両極分解していった、というモデルを提示している。このような諸版本の詳細な比較校勘に基づく系統整理は、著者の旧稿が出揃いつつあるくらいの頃から白話小説研究においても盛んになっている。しかし、白話小説では個々の作品の版本系統の整理こそ着実に進展しているものの、本書が示すような諸作品を横断する整理されたモデルはまだ得られていない。出版地と刊行時期に基づく「閩本」「京本」「徽本」に類する区分は白話小説においても明らかに有効であるし、そもそも戯曲と白話小説の両方を刊行していた版元が少なくない。してみれば、戯曲について著者が提示したのと類似のモデルが、上演という要素を伴わない白話小説においても得られるのか否かを突き止めることは、白話小説研究者に課せられた大きな宿題とすべきであろう。この問題は、小説の「近代」性の芽生えの問題とも密接に繋がっているはずである。

大木『明清江南社会文化史研究』は、「俗文学をめぐって」「文人をめぐって」「科挙をめぐって」「書物をめぐって」の四部構成で25篇の論文を収める。初出時期の幅は30年に及び、扱うテーマも文学作品そのものの成り立ちや背景、文人のネットワークと創作活動、科挙と文学の関わり、書物の形態・流通・挿絵など極めて多彩だが、あとがきに「わたしの研究は、基本的にどれもが、馮夢龍と（中略）冒裏に関わっているとってよい」とある通り、一貫した興味関心の中で結果的に様々なテーマが派生したということのようだ。1997年の初出時には否定的に扱われることが殆どになっていた、『金瓶梅』は王世貞が嚴嵩批判の意図で書いたものだという明末以来の「伝説」に再び

注目した第一章「嚴嵩父子とその周辺」を冒頭に収めた本書が、その「伝説」を肯定する結論を掲げる小松『水滸伝と金瓶梅の研究』と同年に刊行されたのは奇縁と言うべきか。

尾上『中国小説史研究序説』は、2017年に逝去された尾上氏の古典小説と民間藝能を扱った論考を、中国小説史に関する通論からなる「序論」、第一部「中国小説史研究」、第二部「中国藝能史研究」の三部構成でまとめたものである。文献読解に重点を置く第一部と、フィールドワークの成果を中心とする第二部とは、口承文藝から読み物へという著者の小説史観のもとに密接に結びついている。各篇の初出の時期は1964年から1998年までの長きに及んでおり、個々の論考の学術的価値はもとより、20世紀後半の日本における中国小説史研究の流れを知る上でも示唆に富んだ1冊である。

翻訳書は、『元曲選』のうち10篇を訳した後藤裕也・多田光子・東條智恵・西川芳樹・林雅清編訳『中国古典名劇選Ⅱ』（東方書店、2019）が刊行された。後藤・西川・林の3氏の編訳でやはり『元曲選』から10篇を訳した『中国古典名劇選』（東方書店、2016）の続編である。敢えて『元曲選』とはせずにこの書名にしたり、レイアウトに工夫を凝らしたりと、専門家以外には馴染みの薄い元雑劇を少しでも多くの読者に読んでもらいたいとの意欲に満ちた労作であり、全100篇の訳了まで刊行が続けられることを期待したい。また、寺村政男『満洲語『水滸伝』の研究—翻刻と研究』（水門（みなと）の会特刊叢書、『水門（みなと）：言葉と歴史』編集部、2019～続刊）が、全5冊を予定しているうちのⅠからⅢまで刊行された。100回本の抄訳だという満洲語訳『水滸伝』（底本はフランス国立図書館蔵鈔本）の全文をローマナイズ転写した上で、行ごとに対訳形式の日本語訳と注を付しており、日本ではこれまで殆ど研究されて来なかった満洲語訳『水滸伝』を扱う上での基礎資料となるであろう。

一般向けの書籍も、単著に限っても前掲の竹内『最強の男』のほか、井上泰山『三国志への道標』（関西大学出版部、2019）と武田雅哉『西遊記—妖怪たちのカーニヴァル』（慶應義塾大学出版会、2019）の両入門書や、箱崎みどり『愛と欲望の三国志』（講談社現代新書、2019）など豊作であった。箱崎『愛と欲望の三国志』は書名からは内容が想像しづらいが、日中戦争期の日本における三国志ブームの背景を論じた修士論文に基づく章を含みつつ、日本における三国志ものの文学作品を通史的に紹介したものである。なお、2019年の夏頃には、7月から東京国立博物館で開催された「特別展三国志」にあわせて三国志関連の書籍が大量に刊行されていたが、2006年に徳間文庫から出た改訂新版の刷りが途絶えていた立間祥介訳『三国志演義』もこの時期に角川ソフィア文庫から復刊されている。あの立間訳ですら一時は刷りが途絶えていたという事実は、『三国志演義』は現代の日本では大して読まれていないという竹内『最強の男』の指摘を強く裏付けるものであろう。2002年から03年にかけてちくま文庫から出た井波律子訳『三国志演義』も2014年に講談社学術文庫に入る前にしばらく品切れが続いていたから、新しい翻訳が出たために立間訳が読まれなくなったということでもあるまい。どちらの翻訳も数年で復刊されたのは一定の需要があることの証左とも言えようが、古典が絶えず読み継がれていくには、良質な翻訳があるというだけでは不十分である。その

意味でも、有名作品を一般向けに改めて紹介する好著が続いたことはまことに喜ばしい。
(上原究一)

(2) 詩文

この期間、元明清伝統詩文についての著作は必ずしも多くはなかったようであるが、2点ほど紹介したい。前者は、白話小説などの俗文学との関わりも深い。

藤田優子『明代における詞の受容—文字の文學と音の文藝』(汲古書院、2020)では、もともと歌曲であった詞は、元代以降歌われなくなり、文字の上の読み物となったときされる一般的な通念に疑問を投げかけ、明代における詞のあり方につき考究する。明代嘉靖年間ごろから、詞選集の刊行が増加するが、その背景に、当時の文人たちの多くに共通する「真詩」の追究を見る。一方で、明代中期から盛んにあらわれる白話小説の中にも多くの詞が見られるように、詞はなんらかの形で歌われていたのではないかとする。

河内利治『黄道周研究』(汲古書院、2020)は、明末清初に活躍した黄道周につき、政治活動、学術思想、人品道徳、書画藝術などにつき総合的に捉えようとする試みであり、その生涯、表現営為(政治的文章、兵法書、詩文など)、徐霞客・陳子龍・倪元璐らとの交遊、才女であり貞女であった継室蔡玉卿、黄道周・蔡玉卿の書、さらには『雪橋詩話』『人帖』など後世の資料に見えるその姿などについて詳論する。(大木 康)

六、近現代

近現代の中国文学研究は空前の大豊作であった。博士学位取得直後の若手から、長年研究を重ねてきたベテランまで、また作家に即した研究から、新しいジャンルの研究まで、質量ともに充実した研究書が出版された。個々の場で積み重ねられてきた研究の蓄積が一気に結実したと考えられる。以下、伝統的な分類に従い、作家別の研究書からはじめ、ジャンル別の研究書、地域別の研究書という順番で紹介したい。

最初にあげるべきは魯迅研究である。日本における魯迅研究の草創期を担った一人である尾上兼英の『魯迅私論外篇—尾上兼英遺稿集 I [近現代文学篇]』(汲古書院、2019)が出版された。1988年の著書『魯迅私論』に収録されなかった論文を集めたもので、1950年代に書かれたものが中心である。あとがきで田仲一成が書いているとおり、広く内外の作品を読んだ上で、作品の読者として感動の秘密を探るという尾上の方法を見ることができる。ただし尾上にとって読むとは、翻訳をした上で、翻訳者としての感想を記すことである。一見素朴な方法のようで、外国文学研究の基本を後進に示していると言えよう。そうした作業に基づく解釈は、今でも色褪せていない。

現在の魯迅研究をリードする藤井省三は、『魯迅と世界文学』(東方書店、2020)を出版した。2015年出版の『魯迅と日本文学』(東京大学出版会)の続編というべきもので、世界的な視野において魯迅文学および魯迅以降の作家の魯迅読書体験を論じている。ダムロッシュ『世界文学とは何か』など、現在の文学研究において「世界文学」は焦点のひとつになっている。本書は文学研究の潮流に中国文学者として参与したのと言えらるだろう。藤井は、魯迅を導きの糸として、『アンナ・カレーニナ』をはじめとする世界文学のさまざまな作品や、莫言や村上春樹など東アジアの諸作家を、縦横に結びつけ

て論じた。その他の魯迅研究としては、「阿Q正伝」を新しい視点から読み解いた冉秀『「阿Q正伝」の作品研究』（日本僑報社、2019）もある。

周作人研究は近年の日本の中国現代文学研究においてかんばしい成果をあげている。国際シンポジウムを主催するなど、周作人研究の中核を担ってきた小川利康は、『叛徒と隠士：周作人の一九二〇年代』（平凡社、2019）を出版した。周作人の文学活動の骨格を生み出した時期、すなわち日本留学時期から人道主義文学を提唱した五四運動時期、さらには五四の熱気が冷めたあと独自のスタンスを生み出した時期までを対象として、周作人のテキストを丁寧に読み込み、その一つ一つの言葉の背景を広範かつ緻密に調べることによって、周作人の文学と思想をスケッチした。

山口守と坂井洋史は、日本のみならず、中国も含めた世界の巴金研究の中心に位置する研究者である。山口守は、中国では著書『黒暗之光：巴金的世紀守望』（復旦大学出版社、2017）を出版していたが、日本ではじめての巴金研究の専著『巴金とアナキズム：理想主義の光と影』（中国文庫、2019）を出版した。山口自身が発掘した貴重な資料である世界のアナキストと巴金が交わした書簡などを使いながら、巴金にとってアナキズムとは何か、アナキズムの理想を信じた巴金が文学活動をどのように展開したのか、1949年以降の巴金をどのように考えるかといった、作家巴金を考える上で核心となる諸問題に対する一つの解答を示した。

近年中国での活躍が目立つ坂井洋史は、『尋找巴金』（四川文芸出版社、2019）を刊行した。坂井は2013年にも中国語による論集『巴金論集』（復旦大学出版社）を出版しており、本書はその後に書かれた文章を集めている。巴金に関わる小さな問題を精緻に考証する文章、考証からスタートして「文学性」といった理論的な問題を考察する文章など多彩な文章が含まれている。特筆すべきは、すべて中国語で書かれ、ほとんどが中国の雑誌に発表されたことである。ミクロな分析とマクロな議論を有機的に組み合わせる論文の構成から、発表の方法にいたるまで、中国の研究者と直接対話する道を開拓し、今日における中国現代文学研究の一つの方向性を示している。

通俗小説作家とされる張恨水を斬新な視点から論じて注目されながら惜しまれつつ早逝した阪本ちづみの遺著『張恨水の時空間：中国近現代大衆小説研究』（勉誠出版、2019）も日本の文学研究の方向を示すものである。阪本は旧派小説とされる張恨水の小説テキストを丁寧に読み解き、そこに近代的要素を見だし、文学研究の新しい方法を駆使して論じた。文学史の固定的なイメージにとらわれがちな中国本国の外にいるからこそ可能な読解を示したと考えられる。本書には当代文学の論文も収録されている。現代文学を読むときに同時代中国への眼差しを忘れない姿勢も見取ることができる。

1980年代以降の中国文学では、張恨水に限らず、それまで忘却されてきた作家が再発見された。新感覚派と呼ばれる作家たちもその中の一員である。早い時期から新感覚派の一人とされる施蛰存に注目してきた青野繁治は、施蛰存の歴史小説を論じてきた論文を再構成して、『中国モダニズム作家の歴史再構築：施蛰存歴史小説論』（朋友書店、2020）として出版した。歴史小説に注目するのは、歴史と文学のはざまを解き明かそうという問題意識によるものである。その背景には、毛沢東時代に歴史的事実が恣意的に

解釈されたことを見てきたことがあるという。本書は施蛰存研究であるが、毛沢東時代に研究を始めた青野の世代のたどってきた足跡も印されている。

張欣『越境・離散・女性：境にさまよう中国語圏文学』（法政大学出版局、2019）は、満州出身の女性作家梅娘を中心とした文学研究書である。1940年代、日中戦争中に満州文壇でデビューした梅娘を中心として、同時期に上海で活躍した張愛玲、1949年に台湾に渡った両親から生まれ、1940年代の記憶を問いつけた龍応台という三人の文学者を論じることによって、激動の時代に境界を越えることを余儀なくされた女性作家の運命を浮かび上がらせている。それは、「越境」に着目する昨今の文学研究の動向に呼応するものであると同時に、さまざまな意味で境界を越えて活動を続ける張欣の存在自体にも関わる姿勢だと思われる。作家別の研究書としては、他にも、女性作家である蕭紅を女性研究者の視点から論じた林敏潔『蕭紅評伝：空青く水清きところで眠りたい』（藤井省三・林敏潔共訳、東方書店、2019）がある。

続けてジャンル別の研究書を紹介したい。はじめに紹介したいのは、1937年に学部の卒業論文として書かれた「中国現代詩の研究」を含む『倉田貞美著作集』（倉田定宣編、明德出版社、2019）である。倉田貞美は1908年生まれ、東京文理科大学で諸橋轍次に学び、卒業論文で同時代中国の新詩の歴史について書いた。その後香川大学学長などをつとめ、1994年に逝去している。「中国現代詩の研究」は、清末から1930年代までの中国新詩の全体像を、詳細な資料と同時代ならではの清新な観点からまとめたものである。学部の卒業論文とはとうてい思えないレベルで、現在でも新詩史として十分に有用である。この著作集には、他にも新詩に関する論文が収録されている。日本の中国文学研究の黎明期にこれだけの精度の研究があったことは、研究史を塗り替える意味がある。遺稿を整理して出版した遺族の功績は大きい。

若い世代の研究としては、林麗婷『中日近代文学における留学生表象：二〇世紀前半期の中国人の日本留学を中心に』（日中言語文化出版社、2019）がある。はじめの3章では中国人作家の小説を扱い、清末、1920年代、1930年代の中国人日本留学生を描いた作品を論じた。あとの3章では日本人作家による小説を扱い、佐藤春夫『アジアの子』、太宰治『惜別』という論争を呼んだ作品を論じた後、最後の章で、日本人作家が上海に留学した経験を描いた大城立裕『朝、上海に立ちつくす』を扱っている。多様な時代の多様な主体による留学生表象を扱い、比較文学研究の成果を示したと言えるだろう。

近年の文学研究では、文字テキスト以外のメディアについての研究が進展している。その中ではじめに紹介したいのは、田村容子『男旦（おんながた）と摩登ガール：二〇世紀中国における京劇の現代化』（中国文庫、2019）である。新聞・雑誌などに残された劇評を丹念に集めて、伝統劇をめぐる環境の変化と、役者による演技の革新の両面を視野に入れながら、清末から中華人民共和国にいたる京劇の現代化の過程をたどった。田村がとくに注目したのは男旦と女優であった。男旦が女性を演じていた時代から、女優が女性を演じるようになるまでの変遷を、中国社会における女性イメージの変遷と、伝統劇の現代化への改革が複雑にからみあう重層的な過程として論じた。

平居高志『洗星海とその時代：中国で最初の交響曲作曲家』（アルファベータブック

ス、2019)は、左翼音楽家として著名な冼星海の評伝である。冼星海が作曲した「黄河大合唱」の魅力に引きつけられた平居が、日本ではほとんど知られず、資料も決して多くはない冼星海の生涯を追いかけた著作である。日本の中国音楽史研究のほとんどが、上海もしくはハルビンなど大都市の西洋音楽を論じている中で、左翼音楽を正面から研究した数少ない成果と言える。

文字テキスト以外のメディア研究で、質量ともに圧倒的なのは、映画研究である。映画研究では、新たな研究動向を切り開く大きな成果が現れた。日本における中国映画研究の開拓者の一人である白井啓介は、『銀幕發光：中国の映画伝来と上海放映興業の展開』（作品社、2019）を出版した。新聞などの膨大な一次史料と、現地調査を組み合わせ、上海に映画がどのように伝来したのか、伝来当初はどのような上映形態だったのか、そこからいかにして国産映画が生まれたのかといった問題を明らかにした労作である。世界的な映画配給網の中で上海に映画がもたらされ、それが上海の観客の好みと相互関係を結びながら映画が発展したプロセスを、重厚な資料によって論じている。

菅原慶乃『映画館のなかの近代：映画観客の上海史』（晃洋書房、2019）は、若い世代の研究者が、同じように重厚な史料を用いて、映画鑑賞の実態に迫った研究書である。菅原は欧米の映画研究の観点を踏まえて、映画を鑑賞するという行為が近代化の中で生み出されてきたことを論じ、しかもそのプロセスは「想像の共同体」、すなわち近代的な国民国家の形成と表裏一体であったことを明らかにした。新聞や日記、さらには小説テキストにいたる大量の資料を読み込み、それを大きな理論的な視野につなげることで、出色の上海文化史を生み出したと言える。白井と菅原が期せずして同時に行った社会史的な映画研究は、中国映画史を作品の発展の歴史として描いてきた従来の研究を根底から問い質し、近代文化史の新しい視野を切り開く画期的な意義を持っている。

近年中国のみならず世界的に話題となっているドキュメンタリー映画については、日本におけるはじめての体系的な研究書として、佐藤賢『中国ドキュメンタリー映画論』（平凡社、2019）が出版された。佐藤によれば、中国のドキュメンタリー映画は「体制」から独立した表現であるが、その独立とは、作者が主体的に社会をとらえようとし、また観客も主体的に見ることで生み出されるという。そのような表現活動が、1980年代末にいかにして生まれ、2000年代までどのように展開したかを、社会・文化的脈絡から論じた。ドキュメンタリーについては、現在の中国ドキュメンタリー監督として世界で最も注目されている王兵の作品『鳳鳴』（2007）について、映画の中で語られた言葉の再現とその解説を中心にまとめられた土屋昌明・鈴木一誌編著『ドキュメンタリー作家王兵：現代中国の叛史』（ポット出版プラス、2020）もある。

地域別の研究書としては、長年にわたり「満洲国」文学研究をリードしてきた岡田英樹の三冊目の単著『「満洲国」の文学とその周辺』（東方書店、2019）が出版された。『文学にみる「満洲国」の位相』（研文出版、2000）、『続 文学にみる「満洲国」の位相』（研文出版、2013）で日本支配下におかれた「満洲国」における中国文学者の文学活動を論じてきた岡田が、その中心的テーマの周辺に位置するものの、「満洲国」文学を考える上で避けて通れないテーマを論じた論文を集めたものである。具体的には、

1930年代に満洲から逃れて上海で活動した「東北作家」、満洲作家の1949年以降の文学作品、「満洲国」における日本人作家の活動を論じた文章が収録されている。

最後に台湾文学の成果を紹介しよう。台湾文学研究は日本においてすでに大きな蓄積がある。2019・2020年には、蓄積を踏まえ、新たな展開を見せる研究が生み出された。台湾文学研究を草創期から支えてきた下村作次郎は『台湾文学の発掘と探究』（田畑書店、2019）を刊行した。この題名は、新しい資料を発掘し、その資料に基づいて探究してきた足跡を示しているという。日本統治時代から戦後初期、すなわち1930年代から40年代頃までを扱い、魯迅をキーワードにした研究、台湾人作家が「内地」に留学して作った文学雑誌『フォルモサ』をめぐる研究、台湾人作家による日本語創作を論じた研究を収録している。資料を丹念に発掘し、実際に資料を手にとって探究を進める下村の学問的姿勢は、台湾文学研究がいかんにして進展してきたかの歴史を如実に表している。

大東和重『台南文学の地層を掘る：日本統治期台湾・台南の台湾人作家群像』（関西学院大学出版会、2019）は、2015年の著書『台南文学：日本統治期台湾・台湾の日本人作家群像』（関西学院大学出版会）とセットになる研究である。日本統治下の台湾、しかも台湾の中でも地方都市にあたる台南に、複数の文学グループが生まれ、小さな文壇が形成されたことを丁寧に発掘し、中央文壇とは異なる力学のもとで、たしかな文学活動を行っていたことを明らかにした。前著で日本人作家、この著作で台湾人作家を論じ、両者の視点を相対化して台南という場の文学を論じたことに、比較文学研究者たる大東の真価の発揮が見える。

台湾文学研究の最後に紹介したいのは、松崎寛子『鄭清文とその時代：郷土を愛したある台湾作家の生涯と台湾アイデンティティの変容』（東方書店、2020）である。日本統治時代に日本語による小学校教育を受け、戦後中国語を身につけた本省人エリートの作家である鄭清文の作品を追いながら、台湾アイデンティティがどのように形成され、いかんして文学作品に表現されていったかを論じ、同時に鄭清文が台湾社会でどのように読まれたかを論じたものである。鄭清文という個別の事例を通じて、日本統治期から2000年前後までの激動の台湾社会の変容を浮かび上がらせている。台湾文学研究が成熟した段階に入ったことが見て取れる。

論文集としては、特集「中国近現代の知識経験と文学」（『中国21』50、2019）がある。愛知大学で行われたワークショップの内容をまとめたもので、中国近代の知識体系がいかんにして経験に転じたのか、それがさまざまなジャンルの文学表現にどのように融け込んだのかといった大きなテーマをめぐる多彩な論考が収録されている。台湾の学界の最先端の研究者と日本の若手研究者が濃密な議論を行った記録が残されており、中国近現代文学研究の現在地と今後進むべき一つの道筋が示されている。他の論文集としては、九州大学で行われた謝冰心『春水』の手稿をめぐるシンポジウムの記録である中里見敬編『『春水』手稿と日中の文学交流：周作人、謝冰心、濱一衛』（花書院、2019）、早稲田大学で行われた東アジアのサブカルチャーをめぐるシンポジウムの記録である千野拓政編『越境する東アジアの文化を問う』（ひつじ書房、2019）もある。

今回の学界展望では、紙幅の関係で、海外の研究書の翻訳は割愛せざるを得なかった。

ただ小説の翻訳だけは簡単に触れておきたい。SF ファン待望の邦訳であった劉慈欣『三体』全五巻（大森望他訳、早川書房、2019～2021）は、中国文学の枠を越えて大きな話題となり、中国 SF ブームを巻き起こした。SF 作品としては、郝景芳『郝景芳短篇集』（及川茜訳、白水社、2019）、郝景芳『1984年に生まれて』（櫻庭ゆみ子訳、中央公論新社、2020）が翻訳されたほか、アンソロジーとしてケン・リュウ編『折りたたみ北京』（中原尚哉他訳、早川書房、2019）、ケン・リュウ編『月の光』（大森望・中原尚哉他訳、早川書房、2020）、『中国・SF・革命』（河出書房新社、2020）、立原透耶編『時のきざし』（新紀元社、2020）が出版された。

SF 以外でも小説の翻訳は充実していた。王力雄『セレモニー』（金谷譲訳、藤原書店、2019）、閻連科『黒い豚の毛、白い豚の毛』（谷川毅訳、河出書房新社、2019）、阿壠『南京 抵抗と尊厳』（関根謙訳、五月書房新社、2019）、林奕含『房思琪の初恋の樂園』（泉京鹿訳、白水社、2019）、三毛『サハラの歳月』（妹尾加代訳、石風社、2019）、葉石涛『台湾男子簡阿洵』（西田勝訳、法政大学出版局、2020）、徐嘉澤『次の夜明けに』（三須祐介訳、書肆侃侃房、2020）、余華『雨に呼ぶ声』（飯塚容訳、アストラハウス、2020）、李昂『眠れる美男』（藤井省三訳、文藝春秋、2020）、方方『武漢日記』（飯塚容・渡辺新一訳、河出書房新社、2020）など話題作が次々と刊行された。

以上、駆け足の紹介になったがお許しいただきたい。この2年間の豊かな成果が土壌となり、次の新しい研究の芽が吹くことを期待したい。（鈴木将久）

●語学

はじめに

学界展望（語学）は、日本中国語学会・学界展望編集委員会（委員長・秋谷裕幸）が担当する。

従前どおり、本稿も原則として2020年1月から12月までに日本国内で公刊された著書および学術論文を対象とするとともに、重要な研究成果については海外で公刊された成果にも言及する。

研究分野の分類および執筆者は昨年と同様である。分類は「はじめに」、「音韻」、「文字・訓詁」、「文法・語彙（上中古）」、「文法・語彙（近代）」、「文法・語彙（現代）」、「方言」、「教育」であり、執筆者は、項目順に、秋谷裕幸（愛媛大学）、橋本貴子（神戸市外国語大学）、野原将揮（京都大学）、戸内俊介（二松学舎大学）、石崎博志（関西大学）、加納希美（金沢大学）、濱田武志（神戸市外国語大学）、鈴木慶夏（神奈川大学）である。

文中で用いた学術誌の略号は以下の通り。いずれも2020年に出版されたものである。

- | | |
|--------|-----------------------------|
| 『東方』 | 『東方學報 京都』第95冊（京都大学人文科学研究所） |
| 『中国』 | 『中国語研究』第62号（中国近世語学会） |
| 『言語文化』 | 『中国言語文化学研究』第9号（大東文化大学外国語学部） |